

歴史の転換期と人間

— 人物博物館 —

Menschen und Gesellschaft im Umschwung

— das Personalmuseum

種 田
Akira

明*
OITA

はじめに

フランス政府が1982年開館をめざした「ピカソ美術館」(パリ市)の準備が大変に遅れていると聞く。一般公開は早くても1986年、遅ければまさに『大革命200年祭』(1989年)と同時期となってしまう。ピカソ(Pablo Ruiz y Picasso)は1881年生れだから昨年生誕100年であったし、来年(1983年)は没後10年である。

ピカソと、オーエル(George Orwell 1903-'50)の小説『1984』が本稿の切っ掛けである。人物と時代と記念祭を考え併せたとき、筆者の専門に研究しているドイツでは1983年が歴史の交差点(後述の3をみよ)にあたっていること、そしてそれらを文化史として精神史として扱(つか)むには博物館が最も適しているのではないかと考えるに至った。人物博物館というカテゴリーはまだ仮説的なものであるが、歴史展示の一つの在り方として検討するに値するのではなかろうか。奇しくも日本の「文化の日」(1982年)にE.H. カーク(1892~)が亡くなった。

1.

私達が一個人としてアイデンティティ(自己確認)を問うとき、その拠り所とするのは民族と地域—生れ育った土地—の歴史であろう。しかしながら他方で、この歴史の学び方と教育ほど20世紀の現実のなかで変化しているものはないのである⁽¹⁾。かつての王朝史や政治史の重

視から、今日の社会史や経済史の重視への転換は、国際情勢のなかで米ソの戦後「ヤルタ体制」が揺うぎ出し相対的に地位が低下したことで微妙に交錯している。⁽²⁾

マス・メディア、とくにテレビの普及は、⁽³⁾世界のある地域の紛争やある指導者の発言内容がもはや一地域一族の問題ではなく、地球全体の問題となることを内外から伝えてきている。もしも博物館の類型の一つとして社会経済(史)博物館が可能であるとすれば、そのコレクションの主体はVTR+(プラス)マイクロコンピュータ〔統計グラフ、地図、記録映像etc.〕になるかもしれない。

二つの流れ、すなわち第2次大戦後の歴史の世界史化と視聴覚のメディアとしてのテレビの発達普及とは、基本的に共通する事実認識と問題意識をもった各国指導者間の、あるいは諸国民各層の対話をますます必要とし、かつ可能にするであろう。

米ソにみられるような価値観の相対化・多様化、別の言葉でいえば混迷は、歴史の転換期にほとんど常に出現している。例えばアリストテレスの時代、16世紀〔の書物〕⁽⁴⁾、産業革命以降の200年間の時期は、混迷を打破するための対話とその形式を模索したのである。対話は問題を解決しないが、解決の方向と手段の提示となる。作今のサミット、シンポジウム、パネルディスカッションの隆盛と同根のものである。

対話の相手は他者ばかりではない。ある種の博物館に

* おいた あきら

玉川大学文学部

Dozent an der Tamagawa Univ., Tokyo

原稿受理: 1982年11月30日

連絡先(自宅)

東京都世田谷区弦巻5-1-33-108

(電話) 03-420-6957

において、それは展示品を通しての自己自身との対話なのである。コレクションが肖像画であれば、私たちはかつての転換期に自己をおき、現在との比較のなかで「何か」を（再）発見したり感じたりできるかもしれない。しかし、本稿に言う人物博物館とはこのような擬似体験のためだけの肖像画コレクションではないのである。

2.

博物館を分類する基準となるのは、コレクションの内容と形式である。それらは内的必然性をもったコレクション形成史—博物館誕生以前—と、コレクションを成長させ活用し時代の要求に応え、あるいは先取りしてゆく博物館活動史—博物館設立以後—とともになければならない。⁽⁶⁾ また、様々な博物館はそのコレクションの大半が属する学問分野によって性格づけられている。実際、シカゴやデュッセルドルフの社会経済（史）博物館のなかにはパネルによる図解・統計・数字に満ちあふれているのである。⁽⁷⁾ ところが人物博物館の場合、これまで博物館学が重要視してこなかった、というよりは対象とならなかった「人間性」を基礎とするコレクションをもつのである。

人物博物館には博物館の機能と記念物の責務が共存する。人物博物館の多くは顕彰すべき人物の生涯と文化史上の功績・仕事およびその学芸上の影響に関連したさまざまな形式からなるコレクションを有している。建物や規模の大小は別として、コレクションの一点一点がもつこの二重性が問題なのである。たとえそれ粗末な家具や文房具であったとしても、その人物の生活の香があれば重要なコレクションとなるという二重性である。したがって収集すべきもの及びその整理は、このような博物館においては歴史（文化史）的評価に値する人物—彼または彼女の人生と影響範囲—に依存するのである。それゆえ博物館の立地は当該人物の生まれた土地、所縁ある長期あるいは短期滞在地、没した所のいずれかが望ましい。

どの博物館でも、また人物博物館でも建設の基礎となっているのは館の主題の説明である。主題が考古学であれ、美術であれ、理工学であれ、一つ一つの資料・展示品が相互に関係を形づくり、主題の全体像を造りあげていることが公開の基底になければならない。博物館設立の主旨のことでなく、誰の何を主題としてコレクションとする／したかが解説され、体系づけられていなければならないのである。そしてその意味から、画家や陶芸家の名前の付いた美術館よりはそのコレクターの名前の付いた美術館が、さらには彼（芸術家であれコレクターであれ）の生涯に深く関係するものを集めた広義の博物

館が人物博物館のカテゴリーに入るのである。⁽⁸⁾

私たちにとって重要なことは、その人物が抱いたユートピアの精神や理想を歴史的批判にかけるための記録・資史料・記念物を集め、そしてそれらと、またそれらを通して（入館者としての）自己と対話することである。

3.

1983年はドイツの宗教改革者ルターの生誕500年に当る。さらに社会主義者で国際労働者運動、革命運動の指導者マルクス、そして楽劇（Musikdrama）作曲家ヴァーグナーの没後100年である。またマルクスの創始した共産主義の政党を捏造した国会放火事件を口実として弾圧し、こよなくヴァーグナーの音楽を愛したヒトラー（Adolf Hitler 1889-1945）の国家社会主義ドイツ労働党（NSDAP：いわゆるNazis）が政権を取ってから50年目に当たっている。そしてその他に作曲家ブラームスの生誕150年、画家クラナハの没後450年、あるいはフランスの小説家—陸軍経理官として独逸に駐在した—スタンダールの生誕200年なのである。たしかに時代や歴史が人物を産み、人物がまた時代と歴史を創ってゆくのだから、毎年必ず誰かの何かの記念日が巡って来る。けれども、近年たとえば日本の企業の多くが創業・創立100年とか50年とかを迎え、国際化する状況のなかで転期に差し掛かっているように、まさに私たちが生きている現在は歴史の転換期なのである。

以下の表は、F.R.Zanklの研究⁽⁹⁾に基づき、1981～84年に記念祭を迎える人物の人物博物館を抄録してみたものである。

Coleridge, Samuel Taylor; 詩人批評家

1772.10.21 Ottery St. Mary – 1834.7.25 Highgate

- o Nether Stowey (Somerset),
Lime Street : Coleridge-Museum

Corneille, Pierre; 劇詩人『コルネイユ』

1606.6.6 Rouen – 1684.10.1 Paris

- o Rouen (Seine Maritime),
rue de la Pie : Corneille-Museum
- o Petit-Couronne (Seine-Maritime),
60 rue Pierre Corneille : Corneille-Haus

Cranach (Kranach; Kronach), Lukas; 銅版・木版画家『クラーナハ』

1472.10.4 Kronach – 1533.10.16 Weimar

- o Kronach (Oberfranken) : Lukas-Kranach-Museum 〔計画中〕

D. Darwin, Charles Robert; 博物学・進化論者

1809.2.12 The Mount (Shrewsbury) – 1882.4.19 Down

- o Down (Kent) : Darwin-Museum

Disraeli, Benjamin, Earl of Beaconsfield; 政治家文人

1804.12.21 London – 1881.4.19 London

- o High Wycombe (Buckinghamshire),
Hughenden Manor : Benjamin-Disraeli-Haus

E. Eichendorff, Josef Freiherr von; ロマン派詩人『アイヘンドルフ』

1788.3.10 Schloß Lubowitz bei Ratibor – 1857.11.26 Neiße
【ドイツでは125年はよく記念される】

- o Neiße : Eichendorff-Museum
- o Wangen (Allgäu), Atzenberg 31 : Deutsches Eichendorff-Museum
- o Ratibor : Eichendorff-Gedenkstätte. Städtisches Museum

F. Fröbel, Friedrich; 教育者『フレーベル』

1782.4.21 Oberweißbach – 1852.6.21 Marienthal

- o Oberweißbach, Markt 10 : Friedrich-Fröbel-Haus.
 << 1937年にはKindergarten(幼稚園)とFröbel-Museum設立 >>
- o Bad Blankenberg, Am Goetheweg 15 : Friedrich-Fröbel-Museum
 1908/1952 【新規開館】

G. Garibaldi, Giuseppe; イタリア統一運動指導者『ガリバルディ』

1807.7.4 Nizza – 1882.6.2 Caprera

New York, Staten Island : Garibaldi-Museum
1907 開館 (America滞在1851–'53)

- o Como (Lombardia), piazza Medaglie d'Oro 1 : Giuseppe-Garibaldi-Museum
 1932 設立

Geijer, Erik Gustaf; 歴史家・詩人・哲学者・作曲家『イエイエール』

1783.1.12 Ransäter (Värmland) – 1847.4.24 Stockholm

- o Ransäter (Värmland) : Geijersgarden

Goethe, Johann Wolfgang von; 詩人・作家

1749.8.28 Frankfurt a.M. – 1832.3.22 Weimar

o Weimar, Frauenplan 1 : Goethe-National-Museum

1885 Goethe-Schiller-Archiv

1886 Goethe-Haus

o Frankfurt/M., Großer Hirschgraben 23–27 : Goethe-Haus u. Goethe-Museum

1859/97/1954

o Düsseldorf : Goethe-Museum

1953 設立

〔 Ilmenau/Sesenheim (Elsaß)/Wien にもあるが人物博物館とはいえないと思う。〕

o Jena : Goethe-Gedenkstätte【 1817 - '22 間居住 】

1921 設立

H. Haydn, Franz Joseph; 作曲家

1732.3.31 Rohrau (Niederösterreich) – 1809.5.31 Wien

o Wien, Haydngasse 19 : Haydn-Museum

1899 開館

Herzl, Theodor; ユダヤ人作家, シオニズム運動を指導〔 ヘルツル 〕

1860.5.2 Budapest – 1904.7.3 Edach bei Wien【 没後 80 年 】

o Jerusalem Mount Herzl : Grabmal und Museum Herzl

1960 開館

Heuss, Theodor; 連邦共和国初代大統領〔 ホイス 〕

1884.1.31 Brackenheim – 1963.12.12 Stuttgart

o Stuttgart : Theodor-Heuss-Archiv

1964 設立

Hindenburg, Paul von; 軍人・政治家ーワイマール共和国最後の大統領ー

1847.10.2 Posen – 1934.8.2 Neudeck【 彼の死後ヒトラー独裁となる 】

o Posen : Hindenburg-Museum

I.

J. Jeanne d'Arc; 愛国聖少女

1412.1.6 Domrémy – 1431.5.30 Rouen

Orleans (Loiret)/Domrémy (Vosges)/Rouen 人物博物館ではないが3館

Johnson, Samuel; 文学者

1709.9.18 Lichfield – 1784.12.13 London

o London, 17 Gough Square E.C. 4 : Dr. Johnson-House

1946ff. 再建

o Lichfield (Staffordshire), Breadmarket : Johnson-House

1901 開館

K.

L. Léger, Fernand; 画家〔 レジェ 〕

1881.2.4 Argentan (Orne) – 1955.8.17 Gif-sur-Yvette

o Biot (Alpes Maritimes) : Fernand-Léger-Museum

1957 夫人により設立

1967 国立博物館となる

Lessing, Gotthold Ephraim; 劇作家・批評家

1729.1.22 Kamenz – 1781.2.15 Braunschweig

o Wolfenbüttel, Lessingplatz 2 : Lessinghaus

(1777以降居住の家)

1929 設立

o Berlin (活躍した地) : Lessing-Museum

1905 設立 (1911以後 Nicolaihaus に移る)

o Kamenz, Lessingplatz 3 : Lessingmuseum

1931 設立

Luther, Martin; 宗教改革者

1483.11.10 Eisleben – 1546.2.18 Eisleben

o Eisleben, Lutherstraße 16 : Luthers Geburtshaus

1610 火災後再建

1817 公開

1892 博物館として設立

o Wittenberg, Collegienstraße 54 : Lutherhalle

1883 Luther-Gedenkhalle 開館

1932/46 Reformationshistorisches Museum に拡大

o Eisenach, Lutherplatz 8 : Lutherhaus (1497–1501間滞在)

1959 設立してさらに

Deutsches Evangelisches Pfarrhausarchiv を併設

M. Marx, Karl Heinrich; 社会主義者

1818.5.5 Trier – 1883.3.14 London

o Trier : Karl-Marx-Museum der SPDs

1968 開館

Mesdag, Hendrik Willem; オランダ海洋画家『メスダフ』

1831.2.23 Groningen – 1915.7.10 Den Haag ('s-Gravenhage)

o 's-Gravenhage : H.W.-Mesdag-Museum

1903/23

Mistral, Frédéric; フランス詩人・ノーベル賞作家『ミストラル』

1830.9.8 Maillane – 1914.3.25 Maillane 【没後 70 年】

o Maillane (Bouches du Rhône) : Frédéric-Mistral-Museum

1934

Mommsen, Theodor; 歴史家－ノーベル賞（文学）を受く－

1817.11.30 Garding (Schleswig-Holstein)

– 1903.11.1 Berlin-Charlottenburg 【没後 80 年】

o Garding, Am Markt : Theodor-Mommsen-Gedächtnisstätte

N.

O. Owen, Robert; イギリス社会運動家 【没後 125 年】

1771.5.14 Newtown (Montgomeryshire) – 1858.11.17 Newtown

o Newtown, Broad Street : Robert-Owen-Memorial-Museum

P.

Q.

- R. Raabe, Wilhelm; 小説家『ラーベ』
1831.9.8 Eschershausen – 1910.11.15 Braunschweig
Braunschweig, Leonhardstraße 29a : Wilhelm-Raabe-Gedächtnisstätte
1931 設立
- Reis, Johann Philipp; 物理学—電話発明者『ライス』
1834.1.7 Gelnhausen – 1874.1.14 Friedrichsdorf
Friedrichsdorf (Taunus) : Philipp-Reis-Gedächtnisstätte
1952 設立
- Röntgen, Wilhelm Konrad; 物理学者『レントゲン』【没後 60 年】
1845.3.27 Remscheid-Lennep – 1923.2.10 München
Remscheid, Schwelmer Straße 41 : Deutsches
Röntgen-Museum
1930 設立
- S. Schinkel, Karl Friedrich; 建築家『シンケル』
1781.3.13 Neuruppin – 1841.10.9 Berlin
Berlin : Schinkel-Museum
1888 TH【工科大学】に Beuth, Rauch と共に設置される。
1931 開館《新装》
1943/45 分散保管《現在“建築博物館”として構想されている一筆者注》
- Schumann, Robert Alexander; 作曲家
1810.6.8 Zwickau – 1856.7.29 Endenich bei Bonn
Zwickau, Hauptmarkt 5 : Robert-Schumann-Haus
1910 開館
1914/56 市立博物館として生家とも。
- Scott, Sir Walter; 詩人・小説家
1771.8.15 Edinburgh – 1832.9.21 Abbotsford
Edinburgh : Walter-Scott- and Robert-Burns-House (1759–1796)
- Senefelder, Aloys; 石版画発明者『ゼーネフェルダー』
1771.11.6 München – 1834.2.26 München
München : Senefelder-Museum
- Spinoza, Baruch (Benedictus de/Bento Despiñoza); オランダ哲学者
1632.11.24 Amsterdam – 1677.2.21 Den Haag
Amsterdam : Spinoza-Haus
1899 開館
- Stein, Karl Reichsfreiherr von und zum; 政治家—ハルデンバルクとの改革で著名
1757.10.26 Nassau (Lahn) – 1831.6.29 Cappenberg
Cappenberg bei Dortmund : Freiherr-vom-Stein-Museum und Archiv
- Stendhal (Beyle), Marie Henri; 小説家『スタンダール』
1783.1.23 Grenoble – 1842.3.23 Paris
Grenoble (Isère), rue Hauquelin : Stendhal-Museum
1934

- T. Toulouse-Lautrec, Henri de; 画家
1864.11.24 Aloï – 1901.9.9 Schloß Malromé【没後 80 年】
o Albi (Tarn) : Henri-de-Toulouse-Lautrec-Museum
1876 設立
1922 開館
- Tschechow (Chekhov), Anton Pawlowitsch (Pawlovich); ロシア劇作家
1860.1.29 Taganrog – 1904.7.15 Badenweiler【没後 80 年】
o Moskau : Tschechow-Museum
- Turgenjew (Turgenev), Ivan Sergeevich; ロシア作家『トゥルゲーネフ』
1818.11.9 Orel – 1883.9.3 bei Paris
o Orel : Turgenjew-Museum
- U.
- V.
- W. Wagner, Wilhelm Richard; 作曲家『ヴァーグナー』
1813.5.22 Leipzig – 1883.2.13 Venedig
o Luzern : Richard-Wagner-Museum
1933 設立
o Bayreuth, Neues Schloß Glasenappweg 2 : Richard-Wagner-Gedenkstätte
1924 設立
o Eisenach : Richard-Wagner-Sammlung im Reuter-Haus
1897 開館
〔 Graupa : 【人物博物館とは思われない】 〕
- Wieland, Christoph Martin; 詩人『ヴィーラント』
1733.9.5 Oberholzheim bei Biberach – 1813.1.20 Weimar
o Biberach a.d. Riss, Sandengasse 10 : Wieland-Museum
1907 開館
- X.
- Y. Ysay, Eugène; ベルギー演奏家・作曲家『イザエ』
1858.7.16 Lüttich – 1931.5.12 Brüssel
o Lüttich, 14 rue Fourgeur : Ysay-Museum
- Z. Zetkin, C(K)lara; 婦人共産主義者『ツェトキン』
1857.7.5 Wiederau – 1933.7.20 Archangelskoje bei Moskau
o Wiederau, Haus Nr. 190 : Clara-Zetkin-Gedächtnisstätte
1952
o Birkenwerder, Summtener Straße 4 : Clara-Zetkin-Gedächtnisstätte
1957

4. (むすびに代えて)

一人ひとりの人間に所謂「自分史」があるように、地域史・民族(あるいは国家)史そして世界史は多数無数の人々の生活と出来事を含んで刻まれてゆく。1981~84年以外に記念日を迎える人物を加えて、人物博物館は、私たちより以前に歴史の転換期を生きた人々を対象としつつ私たちの現在そして将来の転換期を生き抜きかつ考えよ、と迫ってきている。私のいう人物博物館は、人物をとおして人類と歴史(生活)を考える手段・場所のことである。

「私たちは、人間と自然、人間と人間とのかかわりとしての労働のうちに、新しい価値を創り出す場を見出してゆくことになるでしょう。モラル、芸術的制作も、この労働の場とまったく無関係に生み出されるものではなかったはずだ。日々の社会的また個人的な人間と自然との響きあい、人間と人間との共感・反発・交流の場はひろく労働の場といえるものであるし、ここからほんとうに根をもった新しいかたち^(マア)が生み出されていくのだと考えられます。⁽¹⁰⁾ 今日、石油危機・貿易摩擦・政治不信・受験競争・ロボットOA革命・世界同時不況etc.さまざまに言われるなかにあって、人物博物館を通じて近代文化の構造に迫ることも博物館学の一視座になるのではなからうか。

(1982.1130 -稿了)

<注と備考>

- (1) 問題点が一気に噴き出したのが1982年夏以降の「教科書検定論争」である。博物館に即しては、新井重三・高井芳昭「博物館における歴史展示のあり方と実態」(『博物館学雑誌』第7巻第1号)が余すところなく指摘している。
- (2) 現代の「英雄」待望感の周辺にあるものをバラクロウ(Geoffrey Barraclough)は木村尚三郎との対話の中で以下のように言う;
「「世界諸地域における社会機構や価値観、文化伝統の違いはあっても、人類が根本において一つであることを認識することによって救いがやってくる」(94ページ)といった21世紀への挑戦の姿勢から、「すべてばらばらになり、あらゆるまとまりは過ぎ去った」(167ページ)という事実に対するより深刻な受け止め方、「私たちには余り時間は残されていない」(174, 175ページ)という苛立ち」(NHKブックス298『文明にとっての変革期』1977年202頁)である。
- (3) 昭和33(1958)年5月テレビ受信契約数は100万台を突破した。その後、34年の「ミッチー」(皇太子妃)ブームが購入に拍車をかけ、35年カラー化を経て、37(1962)年3月には全国テレビ受信者数が1000万を突破したのである。
- (4) 拙稿「ドイツ博物館所蔵"Libri rari"についてードイツ技術史研究抄ー」(『科学史研究』Ⅱ 21, No. 142(1982), P107-119.)参照。
ナンヨナル ギャラリー
- (5) 英国には2つの著名な「国立」肖像画美術館がある。肖像画は美術の特殊な領域であるばかりでなく、その人物の尊厳ー人格と仕事ーを最も適確に表わすのである。
◆ Scottish National Portrait Gallery,
Edinburgh/Scotland, Queen Street
◆ National Portrait Gallery,
London/England, 2 St. Martins Place
W.C. 2
- (6) 拙稿「文化遺産と博物館」(大西健夫編『現代のドイツ』⑩所収、三修社1982)P212~213の表1博物館機能の分類ーコレクションの内容、表2博物館資料の分類ーコレクションの形式を参照されたい。

- (7) ◆ Chicago Historical Society,
Clark St. at North Ave. 【筆者未看/
下記博物館パンフレット等から引用】
- ◆ Landesmuseum Volk und Wirtschaft e.V.
Ehrenhof 2, 4000 Düsseldorf 30
【“世界に2つしかない”と説明されている】
——人物博物館と同様、経済／社会経済（史）博物館
というカテゴリーも、おそらく日本では未だ仮説的な
ものであろう。あたかも歴史観が研究者の“時代区分”
に反映するように、博物館の分類も研究者の“博物館
学Museumology”を映すように思われる。
- (8) 甚だ僭越な一博物館にとってではなく筆者にとって
である一例を「大和文華館」に求めたい。同館は「矢
代幸雄記念美術館」と称してもよい、むしろそうある
べき美術館であるが人物博物館ではない。二人の人物
（矢代氏と祖父種田虎雄）の理想を実現したものであ
るが、収集に尽力された矢代氏の生涯・仕事に関する
記録や資料・内外への影響やその分析研究を欠いてい
るからである。〔保坂清『美術館を歩く西日本編』玉
川選書1981年、63～66頁、その他を参照〕
- (9) Franz Rudolf Zankl, Das Personalmuseum.
Untersuchungen zu einem Museumstyp, in:
Museumskunde Bd. 41(1972), H. 1-2, S. 1-132
(とくにS. 80 ff.) ー同じ標題によるDiss. Köln
1969を縮めたもの一、従って状況は1970/71(*ibid.*
S. 2) である。
- (10) 清水正徳「働くことの意味」(岩波書店1982年)198頁。
〔付記〕 1980年6月(公式には1981年12月), 西
ドイツ・ハンブルグ市に「労働博物館Museum der
Arbeit」が設立されたことをつけ加えておかねばなら
ない。本稿では人物をとおして人類と歴史(生活)を考
える「人物博物館」を扱ったが、この「労働博物館」は
人物を生み出した時代の労働をとおしてー工業化時代の
ハンブルグに限定されるがー人間と歴史(生活)を考え
るところなのである。
- 〔メモ〕 旧「ニューヨーク・ハンブルグ・ゴム製造会
社(New York-Hamburger Gummiwaren Comp-
agnie)」工場に開館(予定)。約2700 m²を利用して、
従来の博物館に付随した設備(図書館、視聴覚ルーム、
レストラン等)をくみ込むほかに、勇退職工(労働者)
による実演と解説、経営者・労働者双方の再就職のため
の再教育プログラム、幼稚園児教育、小中高校の授業と
の連携ーなどさまざまな企画がある。
- Kontaktadresse: Museum der Arbeit,
(〔建物〕2000 Hamburg 60,) Postfach 104427,
(Maurienstr. 19) 2000 Hamburg 1
(資料はボン大学Dr. Erich Pauer氏からいただい
たStaatliche Pressestelle 27. 1. 83等からであ
る。) (1983. 7. 12 種田記)